

令和四年度

高等学校入学者選抜学力検査問題

国語

注意事項

- 一 問題は、一ページから七ページまであります。
- 二 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(14点)

ハセとは小三で同じクラスになった。そのころの僕は、いまよりもつとうじうじしていてクラスに友達ひとりもいなかった。もともと消極的だし、臆病^①なので、友達ができるのに人より何倍も時間がかかる。それまで時間をかけて仲が良くなった同級生はみな別のクラスになってしまい、にぎやかな教室の中で、僕はいつもひとりだった。やることがないので、僕はよくノートに絵を描いていた。当時流行^{はや}っていたアニメのキャラクターの絵だ。べつに、絵が好きなのではなかった。休み時間にひとりぼっちであるという情けない状況から ための行動だった。

その日の休み時間も、僕は絵を描いていた。窓際^{まどぎわ}の席だった。ノートに突然人影が落ちて、声がした。「すげえ。おまえ、絵、うまいな！」顔を上げると、今年から同じクラスになった、声の大きな男子がいた。たしか、はせがわくん……と僕は思った。うまいなあ、と彼はもう一度言った。僕の絵はべつにうまくなかったし、ほめられるようなものでもなかった。ただ、休み時間にひとり、窓際で絵を描いている僕に気をつけてくれたのだろう。もしかしたら、本当にうまいと思って話しかけてくれたのかもしれないけど、それはわからない。

「なあ、ほかのも見せてくれよ。」

ハセは持ち前の無邪気さで、僕のノートをぐつと覗きこんできた。僕は急に話しかけられた驚きと、ひっそりと描いていた絵を見られた恥ずかしさで動転し、その瞬間に、なぜかハセを左手で強く払いのけてしまった。ハセは「うおっ」と言ってよろめいた。体勢をくずした拍子に、窓際に飾られていた植木鉢に肘をぶつけた。

² 僕はその瞬間を、いまでもスローモーションで思い出すことができる。

植木鉢が落ちて床にぶつかり、割れた。落下はおそらく一秒にも満たないくらいの時間だったが、僕には永遠にも感じられた。でも永遠なわけはなく、ちゃんと床にぶつかって割れた。すぐく、大きな音がした。肥料の混ざった茶色い土が床に散らばり、むっとしたにおいが鼻をついた。終わった。瞬間的に、僕はそう思った。大げさではなく、当時八歳だった僕は、本当にそう思ったのだ。教室で植木鉢を割るなんて、人生が終わるくらいの最悪な出来事だった。そして何よりもこたえたのが、これと間違いなく長谷川君^{はせがわ}には嫌われただろうし、彼は僕を、根暗^{ねくろ}のうえに話しかけただけで突き飛ばしてきたイヤなやつとして、クラス中に吹聴^{ふいちらう}して回るだろう、ということだった。

いまこの瞬間に、消えてなくなりたいと思った。でも、僕は一步も動くことができなかった。せめて謝らなければ、と思ったが、喉^{のど}がカラカラに渴いて、まともに声が出なかった。すぐに先生が駆けつけてきた。「どうしたの！」

近くで見ていた女子が、佐久田君^{さくた}が長谷川君を、と言いかけた瞬間、「佐久田君とあそんでたら植木鉢にぶつかって割ってしまいました。」さえぎるようにハセは言った。

先生は僕たちを廊下に連れて行って短く説教し、それから一緒に、割れた植木鉢と散らばった土を片づけ、汚れた床をきれいに雑巾で拭いた。雑巾がけをする最中、ぼろぼろと涙がこぼれて床に落ちるたび、それを気づかれないように素早く拭き取るのに、僕はいそがしかった。

「植木鉢は先生が片づけておくから、二人とも、雑巾、水道で洗ってちゃんと干しておきなさい。」先生は優しい口調で言った。

僕たちは土のにおいのする雑巾を持って廊下に出た。すでに三時間目

が始まっていたので、廊下には誰もいなかった。

僕は、雑巾がけをしているあいだじゅう、この人はどうして僕をかばったのかと、ずっと考えていた。どう考えても僕が悪いのだ。面倒だから告げ口みたいなことをしなかっただけで、本当は怒っているに違いない。とにかく謝らなければいけないと思った。

唾を飲みこんで、今度こそ声が出ますようにと祈った。でも、このときもうまく声が出せなかった。謝るという簡単なことが、どうしても僕にはできないんだ。

3 もじもじしていると、僕より先にハセが口を開いた。「いけね、怒られちゃったな。むりやりノート覗きこんでごめん。でもさっきの絵、おれにも描いてくれよ。ほんとはずっと前から描いてほしいと思ってたんだ。おれ、絵、へただからさ。」

日焼けした顔が、無邪気に笑っていた。その笑顔に、僕は、またぼろぼろと涙をこぼしながら、首を縦に振ることしかできなかった。

このときからずっと、いつだってハセは僕が躊躇^{注③}してできないことを簡単にこなして、僕の前を歩いていく。僕には、そんなハセの背中がたまにまぶしく見える。

(小嶋陽太郎「ぼくのとなりにきみ」による。)

(注) ① 性格の明るくない人。 ② 言いふらすこと。 ③ ためらうこと。

問一 二重傍線(〓)部④、⑤の漢字に読みがなをつけ、⑥のひらがなを漢字に直しなさい。

問二 次のア～エの中から、本文中の の中に補う言葉として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 気をまぎらわす イ 心を合わせる
ウ 気を悪くする エ 心を痛める

問三 本文には、教室にいた「僕」が、傍線部1と感じたことが分かる一文がある。その一文の、最初の五字を抜き出しなさい。

問四 本文には、植木鉢が床に落ちて割れた場面があり、傍線部2のように述べている。本文中から、「僕」は、植木鉢が床に落ちていく時間を、どのように感じていたと読み取ることができるか。植木鉢の落下にかかった実際の時間を含めて、簡単に書きなさい。

問五 「僕」が、傍線部3のようになっていたのはなぜか。その理由を、本文中の④で示した部分から分かる、植木鉢が割れた原因に対しての「僕」の認識と、「僕」が考える「僕」のとるべき行動を含めて、四十字程度で書きなさい。

問六 次のア～エの中から、「僕」が傍線部4のようになっていた理由として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「近くで見えていた女子」に、「ハセ」を突き飛ばしたことを先生に言われそうになったから。

イ 「ハセ」にむりやりノートを覗きこまれたことを、まだ許す気持ちにはなれなかったから。

ウ 「僕」にできないことを簡単にこなす「ハセ」の姿をずっと見てきて、「ハセ」に嫌われたくなかったから。

エ 「僕」に対して謝罪する「ハセ」の発言を聞き、「ハセ」の素直で悪意のない表情を見たから。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(14点)

注①

見テ 知リソ 知リテ ナ見ソ

見てから知るべきである、知ったのちに見ようとしないう方がいい、
という意味でしょうが、実はもつと深い意味があるような気がする。つ
まり、われわれは「知る」ということをとても大事なことでして考えて
います。しかし、ものごとを判断したり、それを味わったりするときに
は、そのよび知識や固定観念がかえって邪魔になることがある。だから、
まず見る^①こと、それに触れること、体験すること、そしてそこから
得る直感を大事にすること、それが大切なのだ、と言っているのではない
でしょうか。

ひとつの美術作品にむかいあうときに、その作家の経歴や、その作品
の意図するものや、そして世間でその作品がどのように評価されている
か、また、有名な評論家たちがどんなふう^②にその作品を批評しているか、
などという知識が頭の中にたくさんあればあるほど、一点の美術品をす
なおに、自分の心のおもむくままに見ることが困難になってくる。それ
が人間というものなのです。実際にものを見たり接したりするときには、
これまでの知識をいったん横へ置いておき、そして裸の心で自然に、ま
た無心にそのものと接し、そこからうけた直感を大切にし、そのあとで
あらためて、横に置いていた知識をふたたび引きもどして、それと照ら

しあわせる、こんなことができれば素晴らしいことです。そうできれば、
私たちの得る感動というものは、知識の光をうけてより深く、より遠近
感を持った、ゆたかなものになることはまちがいありません。
実はこれはなかなかできないことです。

では、われわれは知る必要がないのか、勉強する必要もなく、知識を
得る必要もないのか、というふう^③に問われそうですが、これもまたちが
います。そのへんが非常に微妙なのですが、柳宗悦が戒めているの
は、知識にがんじがらめにされてしまつて自由で柔軟な感覚を失うな、
ということでしょう。おのれの直感を信じて感動しよう、というので
す。どんなに偉い人が、どんなに有名な評論家^④が、自分とまったく正反
対の意見をのべていたり解説をしていたとしても、その言葉に惑わされ
るなということです。

作品と対するのは、この世界でただひとりの自分です。自分には自分
流の感じかたがあり、見かたがあります。たとえ百万人の人が正反対の
ことを言っていたとしても、自分が感じたことは絶対なのです。しかし、
また、その絶対に安易によりかかってしまうと人間は単なる独断と偏見
におちいつてしまう。

自分の感性を信じつつ、なお一般的な知識や、他の人々の声に耳をか
たむける余裕、このきわどいバランスの上に私たちの感受性というもの
は成り立たねばなりません。それは難しいことですが、少なくとも柳宗

悦の言葉は、私たちに²へ知の危険性というものを教えてくれます。

(五木寛之「生きるヒント」による。)

(注) ① 日本の美術評論家である柳宗悦の言葉。

② 縛られて身動きの取れない状態。

問一 二重傍線(=)部㊸、㊹のひらがなを漢字に直し、㊺の漢字に読みがなをつけなさい。

問二 波線(〰)部ア～オの中には、品詞の分類からみて同じものがある。それは、どれとどれか。記号で答えなさい。

問三 傍線部1は、本文全体の中で、どのような働きをしているか。その説明として、最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 柳宗悦の言葉をそのまま引用することで、本文の展開に対する興味や関心を読者に持たせる働き。

イ 引用した柳宗悦の言葉を筆者自身が解釈することで、本文で述べたい内容を読者に提示する働き。

ウ 筆者の言葉を抽象的な表現で言い換えることで、本文の展開を読者に分かりやすく説明する働き。

エ 筆者の考え方を柳宗悦の言葉を用いて表現することで、柳宗悦の主張への疑問を読者に投げかける働き。

問四 次のア～エの中から、本文中の□の中に補う語として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア それとも イ もしくは ウ しかし エ なぜなら

問五 本文には、筆者の考える、ものごとに対するときの理想的な過程について述べた一文がある。その一文の、最初の五字を抜き出しなさい。

問六 筆者は、本文で、作品に対するときの危険性の一つとして、傍線部2について述べているが、傍線部2とは異なる危険性についても述べている。筆者が述べている、傍線部2とは異なる危険性を、五十字程度で書きなさい。

三 次の文章は、図書委員会の委員長が、昼の放送で連絡事項を伝達するためにまとめている原稿である。あなたは、図書委員会の委員長から原稿についての助言を頼まれた。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(9点)

図書委員会では、図書室を快適に利用してもらうために、今年は本の整頓や図書室の清掃を重点的に行っています。

このような努力が¹十分な結果として現れたためか、先月と先々月の図書室の来室者数の合計は、昨年度の同時期に比べて二割増加していました。

一方で、本の貸出冊数はそれほど増えてはいませんでした。貸出冊数が増えていない原因について、本を選ぶ際に、タイトルや表紙からだけでは本の面白さが伝わらず、読む本を選べないからではないか、と図書委員会の顧問の先生は言²っていました。図書委員会では、これを課題と³考えています。

これまで、毎月一回のペースで作ってきた図書通信を通じて、本の紹介する活動を行ってきました。しかし、それだけでは、本の魅力を十分に伝えきることができていなかったのではないかと考えました。そこで、新たな企画として、本の人気投票を実施したいと思います。
[1] 皆さんに投票してもらうため、図書委員が毎月、候補の本を数冊選びます。
[2] その情報を参考にして、興味をもった本について、図書室に置いてある投票箱へ投票してもらいます。
[3] 皆さんの投票の結果は毎月、昇降口へ掲示します。
[4] 人気の出そうな本は、早めの貸出手続きをお勧めします。

問一 傍線部1を簡潔に表すために、慣用句を使った表現にしたい。傍線部1とはほぼ同じ意味を表すように、次の()に適切な漢字一字を入れて、慣用句を使った表現を完成させなさい。

() を結んだ

問二 傍線部2を、「図書委員会の顧問の先生」に対する敬意を表す表現にしたい。傍線部2を、敬意を表す表現に改めなさい。

問三 傍線部3を、助詞だけを一語直すことによって、適切な表現にしたい。傍線部3の中の、直すべき助詞を含む一つの文節を、適切な形に直して書きなさい。

問四 本文中に、次の[]の一文を補いたい。補うのに最も適切な箇所を、[1] [4]の、いずれかの番号で答えなさい。

それらのあらすじやおすすすめポイントなどを図書委員がまとめ、図書室の壁に掲示します。

問五 あなたは、原稿が企画の説明で終わっていると考え、原稿の最後に次の[]の中の文を付け加えたほうがよいと委員長に提案した。
[]の中の文が、本文で図書委員会が伝えたかった内容となるように、[]の中に入る適切な言葉を考えて、十字以内で書きなさい。

図書委員会としては、この企画を通して、皆さんに、本の面白さや魅力を感じてもらい、[]
【 】につなげたい
と思いますので、ぜひ投票に来てください。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(7点)

注① とうしゅもつりのかみ

東下野守は、和歌の道に達し、古今伝授の人なりしが、宗祇法師が、

注② こきんでんじゅ
深く通じ

はるばる東国にくだりて、野州に謁して古今の伝授を得けり。然るに、

東下野守お会いして

注③ そうぎ
受けた

下野守、小倉山の色紙、百枚所持したまひけるに、宗祇が志を感じて五

注④ をぐらやま

宗祇の思い

十枚与へらる。宗祇、京都へ帰りし時、いづれにてかありけん水主に、

お与えになる

注⑤ かに
どこの誰かもわからない

かの色紙一枚くれて、これは天下の重宝にて、汝、水主をやめて

注⑥ しちう

世を安くおくる程の料となるものなりといひふくむ。水主へ与へくるる

言い聞かせる

与えてやる

程の事なれば、知れる人毎に一枚づつ、五十枚を皆くられたり。当時、

知り合い

現在

世に残りしは、宗祇の散らされたる色紙なり。野州の方にありし五十

宗祇によつて

枚は、野州没落の時、焼失して一字も残らずとなり。宗祇の意は、

領地を奪われた時

考え

天下の重宝なれば、私にすべきにあらず、諸方に散らしおきなば、

一人だけで所有

あちこちに散らしておけば

時うつり世変わりしても少しは残るべし、一所にありては、不慮の変

残るだらう

同じ所

思いがけない出来事

にて皆うするなるべしと思ひてのことなり。

失つてしまふだらう

誠に宗祇の志、ありがたきことにあり。

考え 立派なことである

(日夏繁高「兵家茶話」による。)

(注) ① 東常縁。室町時代の歌人で、美濃国郡上の領主。

② 「古今和歌集」の解釈の秘話を弟子に伝えること。東常縁が始めたといわれる。

③ 室町時代の連歌師。④ 百人一首が、一枚に一首ずつ書かれた色紙。

⑤ 船頭。小舟を操ることを職業とする人。⑥ 金銭。

問一 二重傍線(〓)部を、現代かなづかいで書きなさい。

問二 波線(〰)部ア、エの中で、その主語に当たるものが他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 宗祇が船頭(水主)に渡した天下の重宝である「小倉山の色紙」一枚には、どれくらいの価値があると、宗祇は船頭に伝えているか。宗祇が船頭に伝えている「小倉山の色紙」一枚の価値を、現代語で簡単に書きなさい。

問四 「小倉山の色紙」を傍線(――)部のように考えた宗祇は、どのような行動をとったか。「小倉山の色紙」を傍線(――)部のように考えた宗祇がとった行動を、宗祇が「小倉山の色紙」を一人だけで所有することでおこりうる問題を含めて、簡単に書きなさい。

マイクロプラスチックによる環境への影響

○マイクロプラスチックとは？

大きさが5 mm以下のプラスチック片

○どのようにできるの？

ビニール袋やペットボトル等のプラスチック製品が適切に処理されずに、主に川から海に流れ出る。

⇒海に流れ出たプラスチック製品が、波や紫外線などの影響により細かくなっている。

○マイクロプラスチックは有害？

- ・マイクロプラスチックは自然には分解されにくい。
- ・マイクロプラスチックには有害な化学汚染物質が付着しやすい。
- ・海洋生物がえさと間違えて食べてしまい、成長に影響が出たり、死亡率が上昇したりする可能性がある。
- ・海洋生物が取り込んだ化学汚染物質は、その生物の体内にたまっていき、その生物を食べた別の生物の体内にもたまっていく可能性がある。

参考：『海洋プラスチックごみ問題の真実』
磯辺篤彦著 令和2年 化学同人 など

図

条件1 一マス目から書き始め、段落は設けないこと。
条件2 字数は、百五十文字以上、百八十文字以内とすること。

五 あなたのクラスでは、総合的な学習の時間の授業で環境問題について調べたことを、班ごとに発表することになった。あなたの班は、マイクロプラスチックによる環境への影響を調べ、調べた内容を図のようにまとめた。そして、調べた内容を他の班の生徒へ効果的に伝えるために、発表の際、図とともに、A、Bのポスターのどちらかを掲示することにした。

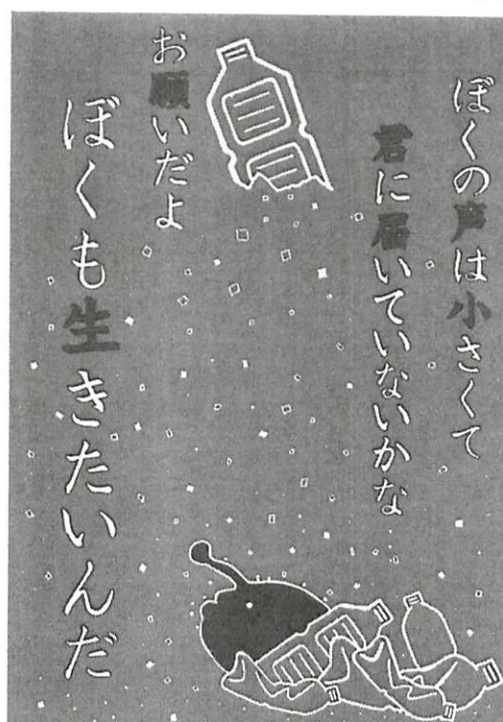
あなたなら、マイクロプラスチックによる環境への影響について調べた内容を他の班の生徒へ効果的に伝えるために、図とともに掲示するポスターとして、AとBのどちらがより適切と考えるか。AとBのどちらかを選び、それを選んだ理由を含めて、あなたの考えを書きなさい。ただし、次の条件1、2にしたがうこと。(6点)

B



(令和二年度「こども教育支援財団 環境教育ポスター公募展」による。)

A



「配点欄には、各問いの正答の場合の点数が示してある。
「採点基準及び採点上の留意事項」の欄に＊印が記されている問いを
除き、部分点を与えてよい。
部分点をどのように与えるかについては、各学校で決めること。

五	四				三				二						一						問題番号	正答例						
	問四	問三	問二	問一	問五	問四	問三	問二	問一	問六	問五	問四	問三	問二	問一			問六	問五	問四			問三	問二	問一			
															㉑	㉒	㉓								㉑	㉒	㉓	
(略)	放つてしまうことがあるので、知り合い(こと)に一枚ずつ五十枚をすべて与えた。	船頭をやめても安心して生活できるくらいお金となる価値。	工	たまい	貸出冊数の増加	㉒	本を	おっしゃって、言われて	夷	自分が感じたことを絶対と信じ、その絶対に安易によりかかると、独断と偏見におちいつてしまう危険性。	実際にもの	ウ	イ	アとウ	いまし (めて)	豊 (かな)	予備	工	自分が悪いと認識し、ハセに謝らなければいけないが謝ることができないでいたから。	自分が悪いと認識し、ハセに謝らなければいけないが謝ることができないでいたから。	たが、永遠のように感じていた。	(おそろく)一秒にも満たないくらいの時間だったが、永遠のように感じていた。	ア	ノートに突	遊 (んで)	のど	おくびよう	正答

計	6	2	2	2	1	2	2	2	2	1	3	2	2	2	2	1	1	1	2	3	2	2	1	1	1	配点 小計
50	6	7	9	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	採点基準及び採点上の留意事項
	自分の立場を明確にし、筋道の通った文章を構成しているか、自分の意見を支える根拠を示した、説得力のある文章となっているか、表記上の誤りや、字数の過不足については、適切な採点基準を設定すること。	同じ内容のことが書いてあればよい。	同じ内容のことが書いてあればよい。	*	*	同じ内容のことが書いてあればよい。	*	*	適切な敬語の表現になっていればよい。	*	同じ内容のことが書いてあればよい。	*	*	*	*	*	*	*	*	「僕」が傍線部3のようになつてゐた理由が、植木鉢が割れた原因についての「僕」の認識と「僕」が考える「僕」のとるべき行動を含めて、適切に書いてあればよい。	同じ内容のことが書いてあればよい。	*	*	*	*	*